

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻		
指導教員	所属・職名	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科・教授	北山 晴 一 印	
自然・人文の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題名	個別的身体体験としての出産---出産体験者の意識調査を事例として		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科 後期課程1年	菊地 栄 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2007 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

修士論文は「消費社会における出産--出産体験者への調査を事例として」であった。後期課程の研究ではそれを発展させ、ジェンダー論および身体論の2つの切り口から「出産」を分析する。少子化、産科医不足、産科集約化という社会的現状を見据えた上で、今後「出産」がどのようになっていくのかを探ることが目的である。

2007年度は出産の実態と体験者の意識を知るためにアンケート調査を実施し、出産準備教育を受けた人と、受けなかった一般の体験者の比較分析を試みた。またケニア、ケリチョー県の母子保健プロジェクトの現場でフィールド調査を実施した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[出産] [少子化消費化社会] [アンケート調査]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度の研究は大きく2つに分けられる。調査1は出産準備教育を受け、医療消費者として積極的に出産にとり組んだ当事者たちがどのような出産を体験し、その体験が出産準備教育を受けなかった一般の当事者とどのような違いがあるのかを、アンケート調査から見ることで、調査2は日本とケニアにおける当事者の主観的身体的体験を比較検討することである。

修士論文では過去にさかのぼって昭和初期に出産した体験者のインタビュー調査を行い、現代との比較を行ったが、本研究ではケニアの地方における母子保健の現場でフィールド調査を行い、現在の日本との比較を試みた。現地では日本の母子保健プロジェクトが行われている山間部で調査を実施した。

調査1)

2007年度は東京で開催されている出産準備教室に参加した人にアンケート調査を実施、集計を行った。それを前年度に行った別のアンケート調査の結果や先行研究のデータと医療処置、分娩の種類、出産施設などを比較し、分析を行った。

アンケート記入用紙 A4用紙7枚 設問53項目

2007年度調査 東京、出産準備クラス (n=176)

調査期間 2006年9月～2007年8月の12ヶ月間

対象者 東京都および近郊(首都圏)在住で、出産準備クラスに出席したのち出産した体験者

配布数 郵送289件。メール配信20。配付20。有効回収数176件。回収率53.5%

出産年齢 平均34才 最年少25才 最年長43才

出産年度 2001年から2007年まで

子どもの数 1.28人。第1子76.1%。第2子以上23.9%

出産場所 病院37.5%、診療所33.52%、助産所+自宅28.41%、不明0.57%

2006年度調査 東京、沖縄、山梨 (n=128)

調査期間 2006年5月～9月の5ヶ月間

対象者 東京都=育児サークル(4団体)の参加者(有効回答数n=66)

沖縄県=育児イベントの参加者(有効回答数n=31)

山梨県=育児サークル(1団体)、保育園に通う母親ネットワーク(有効回答数n=31)

配布数 配付162件。郵送50件。有効回収数128件。回収率60%

出産年齢 平均31.4才 最年少22才 最年長41才

出産年度 1994年から2006年まで。東京は2005年、2006年

子どもの数 1.43人。第1子57.8% 第2子以上35.2%

出産場所 病院54.68%、診療所32.03%、助産所+自宅9.37%、不明3.9%

出産準備クラス参加者は、一般の当事者に比べ、帝王切開率(10.8%<16.4%)、陣痛促進剤の使用率(17.6%<23.4%)などに優位差が見られた。また本調査の集計結果を他の先行研究と比較したところ、都市部では医療介入率が下がっている一方で、帝王切開率が上がっている傾向が確認された。これは安全優先、効率化によるものである。

また本調査と先行研究では出産施設の割合が異なっており、本調査では助産院、自宅が一定数見られ、自然出産率、満足度が高かった。産科医が少なくなっている現状の中で、助産師の活用は検討の余地があることが示された。

研究成果の概要 つづき

調査 2)

2007年8月から9月にかけて、アフリカ、ケニアのケリチョー県において母子保健のフィールド調査を実施した。サハラ以南のアフリカは世界1出生率が高い地域である。アフリカの人口統計は諸国が独立した後、60年代にはじまったと言われているので、独立後に急激に人口増加が起こったのか、それ以前から増えていたのかは厳密にはわからない。70年代後半、ケニア人女性が生涯に出生する子どもの数は8人を超えていた。その時代は日本の昭和初期と同じように10人の子どもがいる家庭は少なくなかったという。しかし最近では避妊法が普及し、子どもの教育にお金がかかるようになったことから、出生率は落ちはじめている。

出生率が高い理由としては、子どもが多くいることに価値や効用を見出す社会であること、初婚年齢の低さ(10代妊娠が多い)、農村などの女性就学率の低さなどが上げられている。こうした要因は、明治時代以降の日本の出生率増加と似ているが、日本の場合には近代国家へ移行する中で富国強兵として「産めよ増やせよ」の国策が講じられた。

アフリカ諸国は言葉が異なるさまざまな「部族」が集合して国家が形成されており、「部族」は文字を持たない文化であった。文字をもたない文化から近代への移行の過程で、国家というマクロな単位が形成され、社会が急激に近代化される中で、次第に部族の規範は希薄になり、セックスの時期の禁忌など伝統的避妊法が薄れていった可能性はある。人々は因習から解放され、欲望の享受を身に着けたが、「避妊」という概念と技術が追いつかなかったと考えられる。

ケリチョーでは、日本のODAが行っている母子保健プロジェクトの活動を山間部の地域で視察した。出産は現在でも自宅で行われている遠隔地もあるが、町では公立病院で行われている。ケリチョーでは病院が限られているため、ひとつの公立病院の分娩数が多い。視察を行った日は、分娩室の2台の分娩台が埋まっており、その前でまさに生まれようとしている産婦が立って順番を待っていた。全開大を迎えているであろうその産婦は、ときおり顔をゆがめるくらいで、腰をさすってくれる人もいないまま、実に冷静沉着であった。ここで言いたいのは医療やケアの質ではなく、声も出さず陣痛を受け止めているその産婦たちの振る舞い、身体性である。日本もかつて出産のときに声を出すことを恥とした文化だった。それは禁じられていたから耐えていたというより、陣痛を受け止め表現する身体性、あるいは精神性が現在とは違った形で備わっていたからではないか。

ケニアの状況は日本の昭和初期に出産した当事者の身体性に近く、こうした出産における身体性は、国や文化の違いのみならず、時代と環境の変化によってもたらされた変容であると考えられる。身体性は時代と共に変容し、文化的に構築されたものであることがわかった。

医療化される前の出産は「自然」の領域とされ、女性にとって選択できない行為であった。結婚、出産が選択的となった現代では、出産身体が消費される時代となっている。今後ますます生殖医療が進んでいく社会において、「出産」「子どもの誕生」はどのように変容していく可能性があるのだろうか。

引き続き本研究では「出産の変容は、自然と身体が乖離したことが影響を及ぼしている」という仮説をたて、出産の可変性をたどり、可能性とその意味を考察する予定である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- 1) 菊地栄、「消費化社会の消費的出産」、紙 REBORN21号、2007、5-7
- 2) 菊地栄、「出産する身体---ケニア」、紙 REBORN24号、2008、5-7
- 3) 菊地栄、「出産身体をめぐるくまなざし>の変遷」、21世紀社会デザイン研究、2008
- 4) 菊地栄、「出産における身体性と可変性--昭和初期に産んだ当事者たちへの聞き取り調査を事例として」、ジェンダーフォーラム・ミッチェル記念奨学金論文
- 5) 菊地栄、「消費化社会における出産--出産体験者の経験と意識に関するアンケート調査を事例として」、21世紀社会デザイン研究学会報告書、2008

④ その他

- 1) <受賞>平塚らいてう賞奨励賞受賞 2007年2月10日
- 2) <学会発表>21世紀社会デザイン学会発表 2007年12月2日
「消費化社会における出産--出産体験者の経験と意識に関するアンケート調査を事例として」
- 3) <研究発表>平塚らいてう賞奨励賞受賞発表 2008年2月9日
「少子化消費化社会における出産--出産体験者へのアンケート調査を事例として」
- 4) <研究会発足>「リプロダクション研究会」、2007年9月
- 5) <大学講義>「少子化消費化社会における出産」
鹿児島純心女子大学看護学科 助産学科 2007年5月30日
鹿児島大学医学部看護学科 母子保健授業 2007年11月22日
聖隷クリストファー看護大学 助産学科母子保健学 2008年1月10日 非常勤講師